

松平 静翁の枕冊子研究について

柿 谷 雄 三

一

近代における枕冊子の研究は、松平静翁の「枕草紙詳解」あたりから始まるといってもよいであろう。すなわち、明治二十三年には小中村義象の「枕草紙講義」一冊、同二十四年には、佐佐木弘綱の「註枕草紙読本」五冊、同二十六年には、鈴木弘恭の「訂正増補枕草子春曙抄」三冊、同二十七年には、萩野由之の「標註枕草紙」二冊が、また同二十九年には縁亭主人の「清少納言」(家庭叢書号外)一冊が刊行されたが、いずれも簡単なものか、啓蒙的なものであり、なんといいながらも、単行本の注釈書として一時期を画したものは、同三十二年二月(上編)・八月(中編)・翌年二月(下編)とに分けて、東京の誠之堂から出版された「枕草紙詳解」三冊であろう。本書は国学院での黒川真頼博士の講義をもととし、著者自らの意見を述べられたもので、口語訳の欄こそないが、その詳細な語釈は全文の解釈ができるように、くふうされていて、まさに詳解の名に価するものであった。特に「師黒川翁曰」としてその所説が多く引用され、他に飯田武郷の説、畠山健、

関根正直博士の意見が紹介されていて、当時における、春曙抄以後の本格的な注釈書といえよう。著者松平静は、明治三十一年七月に国学院を卒業したばかりの新進気鋭の国文学者であって、時に二十三歳であった。その年の十二月末日、「雨すさまじくふる日江戸川のほとり鷗客幽廬のうちにて」その緒言を次のようにしている。すなわち「翁たち(北村季吟・加藤磐斎らをさす)の未だ考へ及ばざりし所、さては考への誤られたりと思ふすぢなどいひつゞくればこの草紙をよむ人々の飽かぬふしと多かめるは、またのがれがたくやあらん。これぞおのれが学足らず才おくれたるをも打忘れて、はやくよりこの草紙の註釈を試みんと思ひ立ちつる一つなる。(中略)過ぎし年おのれ親しく黒川大人に就きて、こゝにはじめて盤た斎抄の説をも知り、さては大人がはやくより考へおかれし説など、とりあつめたるむねを知り得たるは、まことに思ひのほかなる幸になむ。さるをかゝるめでたきむねをば、おのがどちのみ知りたりとて、はたかひなき心地するに、おなじくは、この道にたづさはり、全じ志の人々にも廣く告げなば、一つはわが道の為にもと思ひなりぬ。これぞこの註釈をおもひ立ちつ

る故よしの二つなる。」と。したがって、最初は春曙抄に師説その他を増註して、世に示そうと思っていたが、先年鈴木弘恭の「訂正春曙抄」も出たことであるから、「おのれが力のおよばん限りことごとくに註釈して、たとひ繁に過ぎて煩はしとのそしりは受くとも、簡にして足らはぬ嫌はうけじものところ定めて、」この書を書いた。「文はもはら世に行はれたる春曙抄本によりてしるしたれど、訂正せし所は大かた師大人の説によりてなり。また解かまほしかりし處も、春曙抄にあるものは、そなたに譲りたるも多かり。見ん人おなじくはかの抄とならべよまれ」たなら、便利であろう。しかし、師説引用の責任は一切自分にある。というような意味のことが述べられ、その意図するところが窺えるのである。この菊判和装の優雅な本は、中等教育和漢文講義^{注一}というシリーズの第廿編として出され、上編は桜の巻と名づけられて、黒川真頼・飯田武郷校閱、飯田武郷・黒川真道・芳賀矢一の序十二頁、緒言十頁、通解(解題)六十頁、本文三百三十八頁、中編は葵の巻と名づけられて、本文四百十四頁、あとがき(訂正)二頁、下編は楓の巻(題簽には「紅葉の巻」と名づけられて、本文三百六十頁、あとがき二頁、総計千百九十八頁に及ぶ大冊であるが、その後、好評で相当版を重ねたらしく、筆者の手許にある二、三を調べてみると、明治四十年七月には六版、大正十年二月には十版を出しているから、当時の一版は部数が少なかったにせよ、かなりの売れ行きであったようだ。その間、明治四十四年九月には、武藤元信の「枕草紙通釈」二冊、大正四年六月に溝口白洋の「訳註枕の草紙」一冊、大正五年十一月に窪田空穂「枕草子評釈」(上)、同八年四月に永井一孝の「校枕

草紙新釈」二冊、同十年六月に金子元臣の「枕草子評釈」(上)、九月に内海弘蔵の「枕草紙評釈」一冊、同十三年八月に金子元臣の「枕草子評釈」(下)が相次いで出され、大正十四年七月には山岸徳平博士によって、宮内庁書陵部の三巻本がはじめて活字化せられ(「校註日本文学大系」第三巻の中)、同十五年三月に鳥野幸次の「枕草子新解」(上)が上梓されて、いよいよ昭和期を迎えるようになる。昭和二年二月には、栗原武一郎の「三段枕草子全釈」一冊、同三年になると、一月に、池田亀鑑博士の『清少納言枕草子の異本に関する研究』(「国語と国文学」一月号)、吉沢義則博士の「対校枕冊子春曙抄」(上)、四月に藤村作博士の「清少納言枕草子」一冊、日本古典全集「清少納言」(紫式部日記)と合冊)が出て、枕冊子の研究は三巻本の紹介も加わって盛んになってくる。この年の八月、「枕草紙詳解」の復原版一冊(洋装・菊判・六百九十四頁)が佐伯天涯の編輯によって東京の知世書房から発行される。その後、有宏社版のものも出ているから、「詳解」の生命は、武藤元信の「通釈」とともに、明治・大正・昭和の三代に及ぶのである。前者は、通解(解説・注釈)において詳しく、後者は異本研究において詳細であるから、この明治期の枕冊子研究における二大業績が、相補って昭和にまで及んだのであろう。ただこの「詳解」復版は、全く初版当時のままの組替えにとどまったのは惜しまれるし、武藤元信の研究に比べて、異本のことや殆どふれられていないのは、何としても不満であった。今ここに、本書を研究史の中に位置づけてみるに、すでに永井一孝の「新釈」に指摘されているように、「従来の諸註釈に見る事の出来ない創見もあるが、本

文の校訂が不十分であるので、註釈にも無理な所が往々見受けられる」ものの、「枕冊子註釈史上、明治以降一つのポイントをもつもの」(田中重太郎博士)^{注二}ということができ、「明治のはじめを飾った立派な著述」(岸上慎二博士)^{注三}であったということに疑いはない。^{注四}

二

さて、次に松平静翁のことについて少し述べてみたい。

松平静翁は、明治九年(一八七六)一月二日、福井県敦賀市に生れ、昭和四十六年三月三日、京都市左京区北白川西瀬内町三十の閑居において九十六歳の天寿を全うして、亡くなられた。その九十余年の生涯を通覧すると、幼少の頃はしばらくのぞくとして、

- 一 教員の時代(明治三十二年(一八九九)九月から大正四年(一九一五)七月まで)
- 二 神官の時代(大正四年(一九一五)七月から昭和二十三年(一九四八)六月まで)
- 三 晩年(昭和二十三年(一九四八)六月から昭和四十六年(一九七一年)三月まで)

の三期に大別することができるかと思う。以下順を追って主要な事柄を記してみよう。

翁の生家は福井県敦賀市常宮(じょうぐう)の常宮神社神主宮本家で、二男であるため、福井藩城代家老松平主馬の養嗣子となった。長じて上京し、明治二十八年(一八九五)国学院に入学、黒川真頼博士の講筵に列し、飯田武郷、関根正直博士らの教を受け、清少納言および枕冊子を研究し、同三十一年(一八九八)七月同院を卒業、在学中、春曙抄を筆写しつつ、黒川博士の講義を書入れ、それを基として自らの考えも加えて

「枕草紙詳解」三冊を完成。同年十月末日江戸川の寓居でその緒言を記し、翌三十二年二月五日、東京の誠之堂から上編(桜の巻)、八月一日には中編(葵の巻)を上梓。九月三十日には岐阜県師範学校助教諭心得となった。時に二十四歳。当時、花城と号している。以後、岐阜にあって国語科教員の生活が始まるわけであるが、その年も暮、十二月十八日には「詳解」下編(楓の巻)のあとがきを「夕ぐれもの暗うなりたる」ところに記している。そして、翌三十三年(一九〇〇)二月十二日には、同じく誠之堂から、同書が出版せられた。明治三十九年(一九〇六)には岐阜県師範学校の助教諭に補せられ、十月八日には教諭となる。さらに同四十一年(一九〇八)三月三十一日付で岐阜県立中学校教諭となり、大正四年(一九一五)四十歳の時、七月十九日付で同中学校教諭を退職し、十七年に及ぶ教員生活に終止符を打って、いよいよ神官としての生活が始まる。なお、この岐阜県での教諭たちの手によって後年、翁の歌碑が建てられることとなるが、この事は後掲の略年表に譲る。七月三十一日国幣中社の南宮神社(岐阜県)の宮司、大正十一年(一九二二)四十七歳の七月四日に国幣小社浅間神社(静岡県)宮司となる。昭和三年八月には前述のごとく「詳解」復興版(洋装)が知世書房から出版された。昭和九年(一九三四)五十九歳の時、四月十一日付で、国幣中社北野神社宮司となつて、京都での生活が始まる。昭和二十一年(一九四六)一月七十一歳で、国幣大社賀茂別雷神社(上賀茂神社)宮司となり、同二十三年(一九四八)六月二十八日、七十三歳で同神社宮司を退職し、以後、悠々自適の、作歌と枕冊子の研究(「新枕草子精義」)「未刊」の執筆)

との生活に入る。昭和三十三年八月に出版された「稿北白河」のあとがきには、自伝風に、

私は明治廿八年国学院に入学して、こゝで始めて、正式に歌の指導を受けました。国学院では、歌が正科になつて居て、落合先生が主任で、終始御訓育を受けましたが、私はことに黒川老先生、飯田老先生の御指導をいたゞくことが出来ました。それは私が枕草子の研究に志しまして「枕草子詳解」といふ一書を書きまして、その御高閲御指導を仰ぎます関係上常に両先生の御宅に伺ひましたのですが、その都度必ず詠草を持参して御添削を仰いだものであります。すると両先生は「お前は歌才が乏しくせに、歌の行儀がわるい。歌はもつと気品の高い所を詠まなくてはいけない」と幾度となくお叱りを蒙りましたが、持つたが病で、行儀のわるいくせは、今以つて直りません。

卒業後、岐阜師範学校、岐阜中学校に国語科教員として十七年間勤めましたが、大正四年全県南宮神社官司拜命、こゝで八年間奉務かくて前後二十五年間は岐阜県で御厄介になりましたので、岐阜県は実に私の第二の故郷であります。次で静岡市浅間神社に転じ、こゝで十三年、更に京都北野天満宮に転じ、こゝでも十三年、最後は上賀茂別雷神社に転じてこゝで三年、もう七十にも余りまして、類齢の身健康もすぐれませんので厳肅な神勅は畏れ多いと考へまして謹んで骸骨を乞ひお暇を賜つて、この北白河に隠居して今日に至つたのであります。

隠居後は、旧著「枕草紙詳解」の大改修を思ひたちまして、已に

稿を改めること三回、意に満ちません。只今第四稿執筆中でありますが、命のある中に出来るかどうかは頗る怪しいものですが筆を続けてをります。この仕事と並せて、横好の歌を寧日なく勉強して居りますが、数ばかり積つて目ばしいものは出来ません。「この人にこの歌ありといはるべき一つ二つをよみて死なばや」と述懐しましたが、その一つ二つが、まだ出来ませんので、お蔭でかく長命を保つてをります。今年数へ年八十三になります。

私の故郷は越前敦賀で、常宮神社といふ古い神社がありますが、その神主の二男で、明治九年一月二日生れであります。

昭和三十三年六月廿五日（同書一六八〜一七一頁）

とあって、翁の歩んでこられた道と今後の抱負の程がよくわかるのである。

「枕草紙詳解の大改修」は、神官在職中から多少進めておられたらしく、^{注五}退職後の昭和二十三年（一九四八）六月ごろから「^新枕草子精義」と題して、いよいよ本格的に筆を執られ、同二十五年五月には全段の註釈と解説とが一往完了したようだ。この事はさらに後述したい。作歌の方は、これもはやくから手がけておられたことではあるが、先掲の「^稿北白河」（昭和三十三年八月刊）、「^稿大文字山」（昭和四十年十月北野天満宮社務所内松平静翁先生歌集刊行会刊）、「三十六峰」（同人歌集）（昭和四十三年四月京都市伏見桃山御香宮社務所内三十六峰刊行会刊）、「逢坂山」（共同歌集）（昭和四十六年三月京都市岡崎平安神宮社務所内神葉会同人刊）の四歌集となってそれぞれ出版せられた。翁の歌については、その門下でいらっしゃる北野天満宮禰宜浅井

与一郎氏によると、詠歌数は夥しい数にのぼる由で、歌集に収められたものはその一部分にすぎないようである。その詠風は「三十六峰」の中で星見曼氏が「繊細で剛毅で、古い時代の歴史語りがあると思へば、最近の時事問題に触れ、一輪の草花と見れば、世界の動乱を捉へ、中には雅やかなるお色気も出て参りまして、変転極りなく然も一貫して犯し難き品格気骨があります。洵に着想巧緻に軽妙に、口を衝いて三十一字に纏められ、次から次へサツト詠みあげ、そして知らぬ顔してゐられます。」(同書二一〇頁)と評しておられるのが、もっとも正鵠を得ているとのことである。たしかに、「稿北白河」が出て直後、当時の香取神宮宮司額賀大直氏が「俗を詠んで俗に墮せず、超越の境地に在つて実社会を離れず、実朝にも西行にも会つて居り兼好とは深い交際があり、清女とは相思の關係今も継続して居る事実、降つて江戸期にはくだけて、三馬、一九、蜀山、さては川柳人等とも交友關係あり、俳門のわさびも味はひ、禪門も窺はれたと思ふが、其最も有力なる相談相手否指導者は大人の同国の先輩曙覧であると思ふ。而して筑前の言道も顧問格となつて居りはせぬか。即ち名利に離れ榮達を超越し、全く捕はれる所がないのは両翁に通じて居る。」(「歌の友」昭和三十三年十一月「大文字山」に再録)と評されたのは傾聴に価するおことばであろう。国学者であり、神道家ではあるが、その歌境は広汎で、悠揚迫らずの風が感じられるのは、やはりそのお人柄によるものであろうか。また「稿大文字山」の跋にその編輯にあたられた三木善之氏が「先生今や九十歳。而もなほ同好の士に對し、万葉集や源氏物語や枕草子等の講義を続けてゐられることは、全く驚異に値しま

松平静翁の枕冊子研究について

す。さればこそお歌の随所に、その深く広い学識のひらめきが認められますが、この不断の努力と、不撓の研究力があつてこそ、歌道にあり、書道にあり、将又古典にあり、夫々その道の蘊奥を極められたので、私共の最も感銘深くする所であります。」(同書一八七頁)と記していられるが、たしかに古典文学を素材に詠まれた歌もかなり多い。今、試みに前記四歌集(約二千首)の中から調べてみると、

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 古事記 | 一首 |
| 万葉集 | 三首 |
| 土左日記 | 一首 |
| 枕冊子 | 十一首 |
| 源氏物語 | 十首 |
| 和泉式部 | 一首 |
| 藤原俊成 | 二首 |
| 平治物語 | 一首 |
| 平家物語 | 三首 |
| 徒然草 | 一首 |
| 謡曲(道成寺、卒都婆小町、鉢木安宅、松風、邯鄲、紅葉狩など) | 十首 |
| 湖月抄 | 一首 |
| 小沢芦庵 | 二首 |
- などが挙げられ、他に「絵巻物直衣の人の立倚りて御簾に物いふ花薄かな」(「北白河」)というような王朝的雰囲気詠まれたもの、時代祭行列の清少納言と紫式部とを詠まれたものなどもかなりある。右に挙げた中ではやはり枕冊子に関するものが、源氏物語とともに多く、額

賀氏が「清女とは相思の關係今も継続して居る事実」と評される所以であろう。それも十一首中十首までもが、「新稿枕草子精義」執筆のころの詠を集めた「北白河」所収のものであるのは当然のことながら興味深い。次にその十一首を挙げると、

梅 (春)

一 齒切れよく清少納言断じけり「濃きも淡きも梅は紅梅」

時鳥 (夏)

二 時鳥仲忠腐す人は誰そと柳眉けはしき清少納言

糞虫 (秋)

三 鬼の子といふはあやまり糞虫は案山子の子なり誰も知らねど

鶯鶯 (冬)

四 画にかきて描きまさるもの一つあり鶯鶯の剣羽光琳の筆

雪

五 鼻白みながらもねたくいひ消ちし人なかりきや雪の玉簾

犬 (雑)

六 雪の山筆のひかりに輝きて千歳の後も人の目を射る (全上)

御鏡

七 御鏡を持つ手忘れて及び腰「さは翁丸」尾ふり首ふる

馬

八 白馬の顔より長き舎人にて白粉剥げし大庭の雪 (清少納言)

鼻

九 牛車鞞の香まで聞き知りて鋭どかりけり筆も小鼻も (清少納言)

香

一〇忘れては昨日「昨日今日の香とたどるもをかしひとへ單襲に(清少納言)

猫

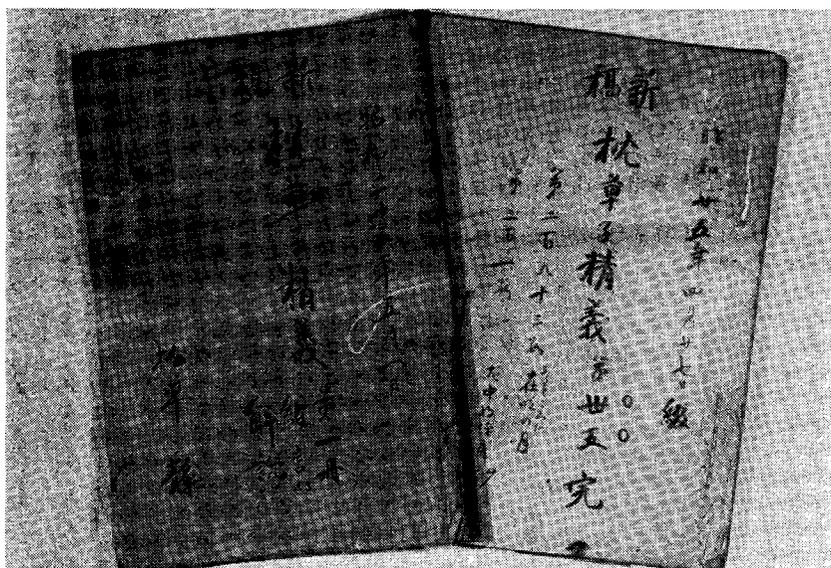
「歌北白河」所収

一一文学史すぐれたる猫二つあり枕の猫と漱石の猫 (昭和四十五年)

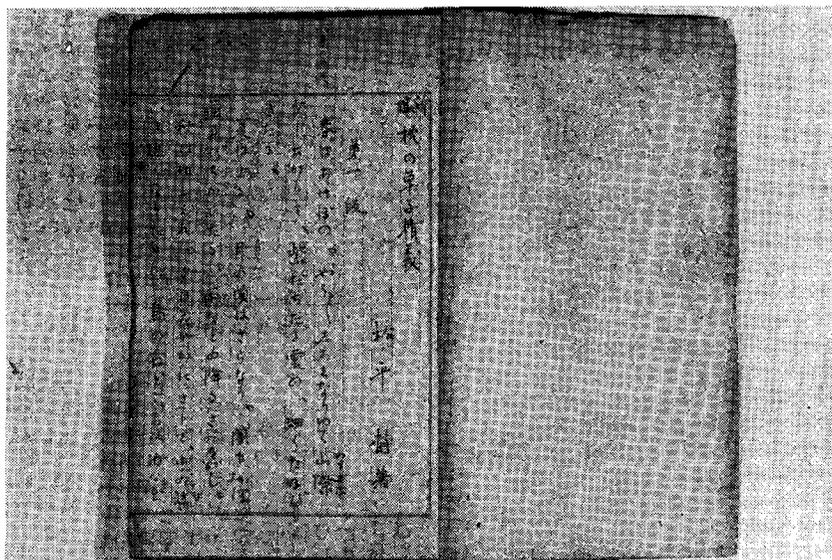
逢坂山」所収

のごとくである。

一は三十五段 木の花はの冒頭の「梅のこくもうすくも紅梅」(能注六凶本・春曙抄も同じ)によられたもの。「新稿枕草子精義」では「梅は濃きも淡きも紅梅」と校訂しておられる。(三巻本は「こきもうすきもこうはい」)二は二百十二段賀茂へまゐる道にの「仲忠が童生ひいひおとす人と、ほととぎす、鶯におとるといふ人こそいとつらうにくけれ」によられたものであるが、ほととぎすについては鳥の段(三十九段)や五月御精進のほどの段(九十五段)、仲忠については、かへる年のの段(七十九段)のことがあることはいうまでもない。三は、虫はの段(四十一段)によるものであろうか。四は描きまさりするもの(百十三段)の影響作品であらうか。五は香爐峰の雪の段(二百八十二段)、六は雪の山の段(八十三段)であるが、むしろ清少納言賛歌ともいえそうな作品である。七は七段の翁丸の条の、「御鏡うち置きて『さは、翁丸か』といふに、ひれ伏していみじうなく」によったものであり、実に巧みな捉え方がなされていると思う。八は、正月一日は(三段)の白馬の節会の条の「舎人の弓ども取りて馬どもおどろかし笑ふをはつかに見入れたば」や「舎人のかほの衣もあらはれ、まこ



「新稿枕草子精義」の原稿



「新稿枕草子精義」第一冊 春はあけぼのの段

とに黒きに白きもの行きつつかぬところは雪のむらむら消え残りたるこ
こちして云々」によつたものである。九は、いみじう暑きころ（三百
十段）の「牛の鞞の香の、なほあやしう嗅ぎ知らぬものなれど、をか
しきこそものぐるほしけれ」によるものであるが、清少納言の嗅覚
の鋭敏であつたことは、二百九段（蓬の香）、二百十五段（柴たく香）、
二百十六段（菖蒲の香）、二百十七段（薰物の香）などにも見えるが、
当然これらのことも含くまれているであろう。また筆鋒の鋭いこと、
自我意識の強いことも指していよう。十は二百十七段の「よくたきし
めたる薰物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、引きあけたる
に、煙の残りたるは、ただいまの香よりもめでたし。」によるもの。
十一の猫は、やはり翁丸の段（七段）に出てくる一条天皇にかわいが
られた「うへにさぶらふ御猫はかうぶりにて命婦のおとどていみじ
うをかしなければ」の猫のことであろう。「新枕草子精義」では「命婦
のおもと」の本文により、「猫については源氏物語にも面白い記事の
あることは周知のことである。（筆者云、若菜の巻のことであろう）
猫と文学、漱石先生の猫をまつまでもない。国文学との因縁は深い。」
とある。ちなみに、五十段には「猫は、上のかぎり黒くて、腹いと白
き。」とある。

三

さて次に、翁の畢生のお仕事であつた枕冊子の注釈——「枕草紙詳解
の大改修」——のことに就いて述べてみよう。

翁の遺された原稿に、前にも少し触れた、「新枕草子精義」三十六
冊、（千八百四十四枚）——翁の記しておかれた枚数による——というも
のがあつた。すなわち、一冊から五冊までは四百字詰原稿用紙に、六冊
から三十五冊と解説一冊とは二百字詰原稿用紙に記された、枕冊子の
全注釈で、先掲の「歌北白河」のあとがきに、「旧著『枕草紙詳解』
の大改修を思ひたちまして、已に稿を改めること三回、意に満ちま
せん。只今第四稿執筆中でありますが、命のある中に出来るかどうか
頗る怪しいものですが筆を続けてをります。」と記しておられる原稿
（第三稿以後のもの）であることに違ひない。いずれも仮綴ではあ
るが、表紙には中央に「新稿枕草子精義第一（〜三十五）」（ただし、第
一冊目のみ「松平静著 新稿枕草子精義第一冊」とある）と書かれ、右
側に年月日、左側下寄りに、「自一頁至五十四頁」「祭の頃ぞマデ」な
どとあつて、本文はペン書きで記され、数回の推敲による訂正書入が
ペンや墨筆・朱筆で施されている。以下各冊の収載段と原稿枚数を記
すと、

第一冊 緒言・解説

表紙一枚、挿絵目次一枚、本文八十八枚（二〇〇字詰）

第二冊

第一段 春は曙 表紙 一枚
第三段 正月一日は 本文 五十九枚

（以下第五まで四〇〇字詰）

第三冊

第四段 ことくなるもの 表紙 一枚
第七段 上にさぶらふ御猫は 本文 六十七枚

第三	第八段 正月一日、三月三日は 第二十段 清涼殿の東北の隅の 第二十段 つづき 第二十二段 すさまじきもの 第二十二段 すさまじきものの余積 第二十五段 にくきもの 第二十六段 小一条院をば今内裏とぞいふ 第三十一段 説教師は顔よき	表紙 一枚 本文 五十四枚 表紙 一枚 本文 五十枚 表紙 一枚 本文 四十八枚 本文 八十二枚
第四	第三十二段 菩提といふ寺に 第三十三段 小白河といふ所は 第三十四段 七月ばかりいみじう暑ければ 第三十六段 池は 第三十七段 節は 第三十八段 木は 第三十九段 鳥は	表紙 一枚 本文 七十一枚 表紙 一枚 本文 六十二枚 表紙 一枚 本文 六十枚 表紙 一枚 本文 八十三枚
第五	第四十五段 とのもりづかさこそ 第四十六段 職の御曹司の立蒞のもとにて 第四十七段 殿上の名対面こそ 第六十段 たとしへなきもの 第六十一段 忍びたる所にては 第六十九段 御仏名のあした	表紙 一枚 本文 五十四枚 表紙 一枚 本文 九十三枚 表紙 一枚 本文 八十一枚
第六	第七十段 頭中将のそゝろなるそら言を聞きて 第七十一段 かへる年の二月廿五日に 第七十四段 さてその左衛門の陣にいきて後	表紙 一枚 本文 六十一枚 表紙 一枚 本文 九十三枚
第七	第七十六段 めでたきもの 第七十八段 宮の五節出させ給ふに 第七十九段 無名といふ琵琶の御琴を 第八十五段 くちをしきもの 第八十六段 五月の御精進の程	表紙 一枚 本文 百枚 表紙 一枚 本文 八十四枚 表紙 一枚 本文 九十七枚
第八	第八十七段 御かたゞ君達、うへ人など 第九十段 淑景舎、春宮に参り給ふほどの事など	表紙 一枚 本文 百十四枚
第九	第九十一段 殿上より、梅の花の皆散りたる枝を 第九三段 正月寺に籠りたるは 第九四段 わびしげに見ゆるもの 第九十五段 「頭の辨の御許より」とて 第九十九段 円融院の御はての年	表紙 一枚 本文 一二七枚 表紙 一枚 本文 百十枚 表紙 一枚 本文 百八枚
第十	第九十九段 殿上より、梅の花の皆散りたる枝を 第九三段 正月寺に籠りたるは 第九四段 わびしげに見ゆるもの 第九十五段 「頭の辨の御許より」とて 第九十九段 円融院の御はての年	表紙 一枚 本文 百十四枚 表紙 一枚 本文 百十枚 表紙 一枚 本文 百八枚
第十一	第九十九段 殿上より、梅の花の皆散りたる枝を 第九三段 正月寺に籠りたるは 第九四段 わびしげに見ゆるもの 第九十五段 「頭の辨の御許より」とて 第九十九段 円融院の御はての年	表紙 一枚 本文 百十四枚 表紙 一枚 本文 百十枚 表紙 一枚 本文 百八枚
第十二	第九十九段 殿上より、梅の花の皆散りたる枝を 第九三段 正月寺に籠りたるは 第九四段 わびしげに見ゆるもの 第九十五段 「頭の辨の御許より」とて 第九十九段 円融院の御はての年	表紙 一枚 本文 百十四枚 表紙 一枚 本文 百十枚 表紙 一枚 本文 百八枚
第十三	第九十九段 殿上より、梅の花の皆散りたる枝を 第九三段 正月寺に籠りたるは 第九四段 わびしげに見ゆるもの 第九十五段 「頭の辨の御許より」とて 第九十九段 円融院の御はての年	表紙 一枚 本文 百十四枚 表紙 一枚 本文 百十枚 表紙 一枚 本文 百八枚

(以下二〇〇字詰)

第廿四 第二百二十段 つれづれなるもの 表紙 一枚
第二百二十六段 清げなるをこの、雙六を日一日打ちて 本文 百十八枚

第廿五 第二百二十七段 おそろしげなるもの 表紙 一枚
第二百四十二段 故殿の御服の頃 本文 八十九枚

第廿六 第四百四十三段 宰相中将齊信、宣方の中將と參り給へるに 表紙 一枚
第五百五十五段 女のひとりすむ家などは 本文 九十一枚

第廿七 第五百五十六段 宮仕人の里なども 表紙 一枚
第六百六十段 宮に始めて參りたる頃 本文 百十一枚

第廿八 第六百六十一段 したりがほなるもの 表紙 一枚
第六百八十五段 五月の菖蒲の 本文 百十枚

第廿九 第六百八十六段 よくたきしめたる薰物の 表紙 一枚
第二百二段 岡は 本文 九十三枚
第二百三段 社は 表紙 一枚

第三十 第二百三十六段 御前に人々数多、物仰せらるゝついでなどに 本文 百三十枚

第卅一 第二百三十七段 関白殿、二月二十日の程に、法興院の積善寺といふ御堂にて 表紙 一枚

第卅二 第二百三十八段 たふときもの 表紙 一枚
第二百五十三段 常に文おこする人の 本文 八十八枚

第卅三 第二百五十四段 きら／＼しきもの 表紙 一枚
第二百六十八段 よろしき男を下衆女などの誉めて 本文 八十八枚

第卅四 第二百六十九段 大納言參り給ひて 表紙 一枚
第二百九十二段 物語をもせよ、昔物語もせよ 本文 九十二枚

第卅五 第二百九十三段 ある所に何の君とかやいひける人の許に 表紙 一枚
第三百一段 左中將のいまだ伊勢守と聞えし時 本文 八十六枚

のごとくであつて、本文注釈は四百字詰原稿用紙の部分が二百七十八枚、二百字詰原稿用紙の部分が二千八百七十七枚（四百字詰として計算すると千四百九枚）、緒言・解説の部分が二百字詰で八十九枚（四百字詰とすると四百五枚）、合計四百字詰として、千七百三十二枚に及ぶものである。なお、これ以外に目録、索引、系図年表等も予定されている。らしく、先掲千八百四十四枚と翁が記しておられたのはそれらを合めての枚数であろう。

さて次に、緒言・解説のところ、本稿の意図その他を、翁が詳述しておられるので、それらを紹介したい。

「詳解」下編のあとがきに、「なほこの註釈につきて、くりかへし行くに、案外なる誤りを見出し、また解きおとし、いひひがめしたる処、甚だ多くして、斯道の罪を得たる事甚だ大なるを恐る。これ等は版を改むる毎に追々に改めんと思ふを。（中略）おのれ他日また参考

枕草紙をものせんと念あり。今よりその研究に従へり。」(同書三六一頁)とあって、「参考枕草紙」という新しい著述を考えておられたようであり、また、「殿舎の事。装束の事など、(中略)必ず附録として出すべし。」ともあって、詳解附巻とでもいふべきものも、計画されていたようであるが、それらは遂に出なかった。「精義」の緒言というのは、四百字詰十二枚に及ぶものであるから、到底ここに全文を引用できないが、以下かいつまんで記すと「早速に増訂を施さねばならぬと思ひながら、その機会と余裕とを得ず、在再五十年遂に今日に至つた」として、武藤元信の「通釈」以下「詳解」以降に出た主要注釈書の名を挙げ、「詳解は、全釈の魁で、最も夙く学界の注目を引いたものではあるが、何分にも古い。何等の補正をも加へてゐない。従つて詳解以後注釈書の出るごとに、必ずその誤謬、粗漏の点が指摘される。属目される光榮はありがたいが、応酬することの出来ぬ苦痛はたとへ難いものがあつた。」と述べて、「昭和二十三年(中略)神職を辞することゝなつたので、こゝにその余生を、専ら枕草子注釈に捧げむものと決意し、爾來拮据、稿を改むこと四回漸くこの精義を完結することが出来たのである。最初の程はたゞ『詳解』の補正に止まる程度で着手したのであつたが、筆を進めて見ると、到底満足することが出来ない。そこで全然詳解を離れて、新なる構想の下に、全くの別著とし世にとふことゝしたのである。乃ち詳解の誤を正すと共に詳解後の諸家の新研究をも広く取り入れ、更に徳川時代先賢の諸注を再検討し、貧弱ながらも五十年間の考究を傾注し、新古の精を蒐めたといふ積で『新枕草子精義』の名を冠した次第である」(「精義」緒言・解説

松平静翁の枕冊子研究について

八(九頁)と、あって相当な意欲を盛つた著述であることが窺えるのである。諸注の紹介が記されている中に、関根正直博士の「集註」とがあるが「この書(集註)の第一稿は、実に明治三十二年に出来上つてゐたのであるが、その頃自分(松平翁)は詳解起稿の為、屢々先生のお宅に何つて御指導を仰いでゐたのであるが、一日先生のいはれるには、実は自分の著述も已に出来上つて、何時でも出版者の手に渡される様になつてゐるのだが、今これを出しては、何だか若い君と競争するやうにも感ぜられて面白くない。自分のものはいつでも世に出せるのだから、この際は差控へておく。どうか君のを一日も早く出版するやうに精々奮発してくれとの御言である。自分はたゞ感泣して御恩情を拝謝し、文字の如く日夜馳勉、脱稿することが出来た。」とし、「詳解の世に出た因縁として、永久に感謝せねばならぬ恩恵」であり、その後も「幾度となく、詳解補正について懲懲鞭撻を賜つた」(「精義」緒言、解説四(五頁)と記しておられるが、お二人とも故人となられた今日、この美しい師弟関係を、一言触れさせていただいてもよからうと思う。ちなみに関根博士は昭和六年二月刊の「枕草子集註」の例言で少しこのことについて書いておられるが、合せて読んで見ても興味深い。

次に本書の執筆態度として、「本文」、「語釈」、「通釈」、「余釈」、「積」の説明がなされている。本文は「底本を春曙抄におい」て「たゞ明なる誤とか、他本の方が著しく、原作者の趣意に近からうと認めるものは、それを採つて修訂した」とあって、この点は今日から見れば問題があるが、昭和二十四五年という時点に立って見る時、「校本枕冊

子」も出ていなかった当時であるから止むをえなかったともいえよう。「語釈」は「出来得る限り詳密を期し、新古諸説の取るべきは成るべく広く網羅し、自家の臆説をも精記して大方の教を仰」ごうとし、「通釈」は「逐字的、直訳的ではなく、語釈と相俟つて、一段の主旨を明にせむことを期したもので、その為相当語を補つたり、本文の語位を転換したり、可なり自由な態度を取つた」とあって、意識がなされていることを意味する。次に「余釈」として、「語釈、通釈以外になほいひたいことがある場合」、「所謂評釈とか批評とかいふものに該当するが、あまり広汎に亘つて文化史の講義になる様なことは避けて、努めて枕草子本文に直接した、批評や余義」が述べられているというのである。「釈」は、「一段ごとに必しも、この三項（語釈、通釈、余釈）を具備する必用を見ない」場合、「語釈しつゝも通釈的に説」いたり、「語釈しつゝも、ことに注意すべき語句を特に提擧したり、一句一句の妙味をそこで批評」したりするために設けたとある。それから枕冊子の研究が近年非常な進歩を見たことに触れ、「本文批評の如き真に隔世の感がある」とし、反面、有職故実の方面は進歩が遅いとして、「有職と音楽とに聾で盲では」王朝文学の研究に大きな支障となるであろうとも述べている。たしかに、古くは関根博士の有職故実、風俗、服装方面の研究、近くは池田亀鑑博士の「平安時代の文学と生活」、中村義雄氏の「王朝の風俗と文学」などで代表されるその方面の研究は今後もさらに推進されねばらぬ分野であろう。

この緒言の日付は昭和二十五年四月廿七日とあって、文中には昭和二十三年六月頃から執筆を始めた由、記されているので、一往の注釈

の稿を終えてから、緒言がしたためられたものと見てよいであろう。さて、次に解説の方であるが、これは、詳解の通解（解説）ほど長くなく、内容もやや啓蒙的である。すなわち、

- (一) 作者
- (二) 書名
- (三) 枕草子の成立
- (四) 枕草子の注釈
- (五) 枕草子の内容
- (六) 枕草子と中宮定子の御上
- (七) 清少納言の経歴

の各章から成り、末尾に簡単な清原氏系図が添えられている。四百字詰原稿用紙になおして、三十三枚の分量である。

この中で一、二を紹介しておく、(三)の成立に関しては、跋文の訳文をあげて、「物ぐらうなりて云々」を第一稿の跋文の断片ではないかとし（以下「精義」第卅五の注釈をも参考して記す）、「この草子、目に見え云々」を第二稿の跋文、「宮のお前に云々」第三稿か第四稿かわからないがまた別の時に書いたもの、「左中将のいまだ伊勢守と聞えし時云々」も、第何稿かの跋文であるとし、いずれも、「偽作でないかといふ説もあるが、そうではなしにやはり自作だらう」としている。さらに自跋であることを前提として、「伊周は正暦五年八月に内大臣になつて長徳二年四月までつよく、その最も早い所で正暦五年に冊子を賜つたとすれば、それから直に書きはじめて、長徳二年の頃は相当出来上つたと想像してもよからう。（中略）出来上つた分は中

宮の御覧に入れたものと推定して誤はなからう。するとその辺からも宮廷の中には広がったものと見ることも自然であらう。好評を博して、猶も書きつゞける、第二稿となるわけである。その第二稿に附記したのが、前記跋文（「この草子……もり出でにけり」をさす）であらう。世の中にもれたといふことを書いてあるから、第一稿にかける跋文でないことは明である。かくして長徳二年三年四年と書きつがれる。その都度都度中宮には御覧に入れたものと想像する。かくて長保元年、二年となるが、草子中の史実に関する記事はこの長保二年六月頃まで散見する様である。然るにこの年の十二月には中宮は御産で崩御になる。史実関係の記事もその後は無論見えない。要するにこの枕草子も中宮崩御の年を以て史実は記されなくなつてをるのが事実である。たゞ長保二年の記と雖も、必ずしもその時直に記されたものではなく、二年以後、即中宮崩御後書かれたものもあらうが、事件が二年で畢つてゐるといふ点が、枕草子の運命と、中宮の御生涯との間に深い因縁があるものと観ぜられる。」とし「正暦五年、長徳元年頃から起稿されて年々継続されたもの、そうして中宮崩御まで書き継がれつゝ、幾度となく補正されたものと見たいのである。寛弘年代になつての筆かと思られるものも一、二ある様だが、或はその頃まで折に触れて正されもし、追加されもしたのでないか。」（「精義」解説四一頁）と結んでゐる。この成立論において、原存の跋文の意味が難解不通の箇所が多い所から、自跋ではあるが、後人が「幾つかの断片を綴合補修して一篇の如く仕立てたものと推定」（「精義」第三十五、二七八七頁）して、枕冊子の成立も、数回にわたつて書きつがれ、その度

松平静翁の枕冊子研究について

に、跋文がそえられていったものではないか、という多元成立説ともいふべき考えが示されている。枕草子の形態的浮動性については楠道隆教授にも御説のあるところであり、^{註八}松平翁のこの説も、論証にまだ十分でないところもあるが、一つの仮説としてみるべきであらう。

(五)の内容では、池田亀鑑博士が示された五分類すなわち、(1)天然自然の現象又は客観物に関するもの（——は）(2)主観的な精神内容に関するもの（——もの）(3)四季の情趣に関するもの(4)自然又は人生の感想に関するもの(5)日記・紀行等に関するもの、にもとづいて、(1)は歌枕的、(2)は(1)と併せて「枕草子の特別な様式を示したもので、興味深いものが豊富に盛られて」い、(3)(4)も「情趣ゆたかに、人生の妙味を把握したものが多く、ことに目につくのは、その短篇において、電光の如く、作者の面目を瞥見せしむるものが少くない」（「精義」解説五三〜五四頁としながらも、(5)の目的な所謂史実の文を、「十分力の入ったものが多く、就中最も光彩を放っている」とし、これこそ「枕草子の本幹」であると述べている。

(七)の清少納言の経歴に関しては、橘則光のことを、「義兄といはれた修理助則光」というふうに見て、「精義」第十五の注釈中にも、「いもせといつても妹夫でなくて妹兄である」とされたのは「詳解」以来の旧説によられたのであるが、いかなるものであらう。初宮仕に關しては、「詳解」にはその年代を何年とみるかは示されていないが、「精義」第廿七の注釈には「まづ正暦三年冬位と見たら、大して誤はなからうと思ふ。主上御年十三、中宮十七、伊周十九、清女の年は分らない。廿四五、(六、七)位の所だらうか」とあつて、正暦三

年冬説をとられ、解説の方には「正暦三、四年の頃といふのが多くの学者の畧々一致する所」というふうにならされている。妥当な見方とすべきであろう。ただ、清少納言の年令に関しては解説では「廿二―廿四五」とあつて「精義」の記述と多少若く書かれているが、「精義」の（六、七）の文字は、後日推敲の際書き加えられたもので、岸上慎二博士らによって主張されている通説の推定年令に近づけられたものであろう。

四の注釈の項は注釈史を略述されたもので、その中に「詳解」の出来あがるまでの裏話のような一節があり、当時、黒川真頼博士の講義を拝聴するのに、学生の多くは博文館発行の日本文学全書本、次に萩野由之博士の「標注枕草紙」、鈴木弘恭の「^{訂正}増補枕草子春曙抄」を持つてき、まれに木版本の春曙抄を持っている者もあった由であり、「自分は黒川先生のお勧めによつて、書道の練習にもなるからといふので、講義を承る所だけ、毎週春曙抄を透写して、それに書き入れることにしてゐた。それが『詳解』の基本となつたものであるが、後年己むを得ないことである人に貸したまゝで返つて来ない。遺憾の極である」（「精義」緒言解説四八頁）と記しておられる。なお、「精義」執筆当時、参考にされた新しい文献（大体昭和十年以降）としては、田中重太郎博士の「枕草子の精神と積義」（昭和十八年七月旺文社刊）、池田龜鑑博士の日本文学大辞典（昭和七年六月新潮社刊）の解説、それから（四）の清少納言の経歴の項に、岸上慎二博士の「清少納言伝記攷」（昭和十八年二月畝傍書房刊）が良著として紹介されている、他に、「精義」の語釈や余釈などで引かれているものとしては、山岸徳平博士「校註枕草

子」（昭和十四年三月）、吉澤義則博士「校註枕草子」（昭和二十五年一月）（武威書院刊）
昭和二十六年三月）などもあつて、当時における主要な参考文献は一往見しておられたものと解せられる。

ただ、この解説中、諸本の項がなく、他にもあまり触れられていないのは、ややもの足りなく、枕冊子のごとき、異本が系統的に対立し、それが成立の問題にも関連してくる作品の場合、是非とも、この面からの考察を加えた一節がほしかったと思う。もっとも、「精義」の注釈の中には異本の問題は多少扱われてい、とくに、春は曙の段の余釈の項に諸本についての説明が加えられてはいる。

さて、次に「精義」の注釈の部分を紹介しておきたい。

まず、その執筆の時期に関してであるが、先に記したように、全三十五冊中、二十二冊にはそれぞれの表紙右寄りに年月日が入れられており、また最後の三十五冊目には末尾に「昭和二十六年二月十三日稿了」の文字も見られるので、それを次にまとめて記してみよう。

昭和二十四年

十二月二十三日 第一冊（三稿）、第二（三稿）、第三（三稿）、

第四（三稿）、第五（三稿）、

昭和二十五年

一月 第六、（第七―十五もここへ入るか）

二月 七日 第十六（三稿）（第十七、十八、十九もここへ入るか）

二月 十八日 第廿

二月二十一日 第廿一

二月二十四日 第廿二
 二月二十七日 第廿三
 三月 十日 第廿四、第廿五
 三月 十二日 第廿六
 三月二十一日 第廿七、第廿八、(第廿九もこのあたりか)
 三月二十七日 第三十
 四月二十一日 第卅一
 四月二十七日 第卅二、第卅三、第卅四、第卅五、緒言を書く。
 五月 一日 緒言、解説、
 昭和二十六年

一月 三十日 第一冊(四稿)(三稿に書入訂正)
 二月 十三日 第卅五(推敲)(末尾の日付)
 以上は、表紙の日付によるものであり、表紙を付けられた日を示すものであるから、厳密な意味では原稿の執筆月と若干のずれはあろうが、今はこの日を以って一往稿の成立の時と見做しておこう。(一)をもっとくくってあるのは、日付の書かれていないものである(第五冊までは前述のごとく四百字詰の原稿用紙に記されたものであり、その紙の感じからいっても、少し前から書かれていたものであろう。昭和二十六年一月三十日の第一冊四稿や二月十三日という第卅五冊の末尾の日付は、それぞれ推敲書入れ訂正をされた日の日付と見てよからう。したがって、「新稿枕草子精義」の主な執筆期間は、「精義」の緒論の中(二十二頁)に書かれているように、昭和二十三年六月頃から、第卅五に記載されている昭和二十五年四月二十七日までであり、その日に緒

言が書かれ、日ならずして、解説が五月一日までに書かれたものであろう。その後も絶えず、訂正書入がなされ、「歌稿北白河」のあとがきの書かれた(昭和三十三年六月二十五日)のころも、推敲がつづけられていたものと思われる。それは各冊の末尾にメモふうの日付がいくつか記入されているのによってもわかる。この推敲は長期日に及んだであろうし、翁としては、もうこれで世に発表してもよいと決意されるまでにいたったかは疑問であり、とくに後段の箇所はさらにもっと訂正増補を意図しておられたものと思われる。先掲の「稿を改める」と三回、意に満ちません。只今第四稿執筆中ではありますが、命のある中に出るかどうかは頗る怪しいのですが筆を続けてをります云々」(「北白河」あとがき)の記述は多少の謙遜のお気持はあるにしても、未完の著述であるとしてよいのではなからうか。
 最後に、第一段「春は曙」の所から摘記してみよう。

(語釈)

○春はあけぼの その下にイトヲカシといふやうな語を含めた独立の一断句(提示句)である。斯様に用言や助動詞を用ゐず、直に体言をもつて述語とする所が、清女慣用の手法で、やゝもすれば冗漫、平弱に陥り易い国文の弊を濟ふ効果もあり、語形また緊縮簡選にして、餘韻をもたしめる巧妙な用法でもある。次々に来る「夏は夜」「秋は夕ぐれ」「冬はつとめて」等も、皆同一の筆法で、こんな辞様が段々と精練されて、終に新古今に見る様な体言止の幽玄をも生み出すに至つたものと思はれる。なほ次にある「細くたなびきたる」

「螢の飛びちがひたる」の如き、助動詞の連体形で止めたのも、同様な効果を現はす用法で、この二つは枕草子全体に見る特色ある句法である。

○白くなりゆく山際 は段々と白みゆく山際である。然るにこの白くを著くしの意に見なくてはハツキリしないといふ説がある。あまりにも窮屈な見方である。夜の白みゆく山際に十分に聞えるし、又それが穏当である。

○少しあかりて 聊か赤味を見せてゝある。このあかりてを「上りて」の意に取つて、山の上を少し離れてゝあるといふ説がある。これもあまりに理屈っぽくて面白くない。なるべく平易に安らかに見てゆきたい。

○雨などのふるさへをかし 雨のふるままでがさへ面白いといふので説明をまたない句であるが、元来清女は雨が大嫌で、草子中にも至る所で、雨を嫌つた叙述が見える。ことに二六二段注十の雨月論の如きは、その尤なるものである。そんなにイヤな雨までが面白いといつた所に清女の個性が見える。(以下略)〔「精義」第一冊二〇三頁(通釈)〕

春は曙の景がまことに面白い。段々と白みゆく山際が少しあかるみを見せて、紫がゝつた雲の細く棚引いた工合が何ともいへない。

夏は夜が面白い。月の頃はいふまでもない。闇といへども、螢の飛びちがつたけしきなどはまことに捨て難い。もう一つ突つこんでいへば私の嫌な雨などのふるさへも面白い。

秋は夕暮である。夕日花やかにさして、山の端近く入りなんとす

る折から、晴に急ぐ鴉が、三つ四つ二つと飛んでゆく、実にいふべからざる風趣である。まして秋天(季) 遠来の客、列を作つた鴈の遙に小さく見えるなどは、又格別な興味を感じる。日が暮れて後の、風の音、虫の声、いふにや及ぶ、身にしみて感じが深い。

冬は早朝といひたい。雪の降つたなどは勿論のこと、霜などの真白におき渡したのも面白い。又そうでなくても、寒い朝など、大急ぎで火などおこして、炭など持つてあちらこちらと運んであるく、こんなあわたゞしい行動も、冬といふ季節の感じにピッタリと打合つて気がいい。私は冬の寒さに、こんな興味を覚える。所が屋にもなると、いつの間にか寒さがゆるんで、圍炉裏や火鉢の火が白い灰がちになつて居るなどは聊か間がぬけて感心しない。

〔「精義」第一冊六〇七頁〕

なお、余釈の項であるが、

「枕にこそは」と申上げて、中宮から賜つたこの冊子、何から書き初めたものかとは、清女も相当考へたことであらう。その結果、やはり四季の感興からと決心して筆を下した第一語が、この「春は曙」の名句である。清新、奇抜、前人未だ嘗て言はざる所を道破した。眼光は儘に流俗の視野を超絶して、高く且つ鋭い。

〔「精義」第一冊八頁〕

と説きおこして、春曙抄や岩崎美隆の枉園抄を引いて全段の鑑賞批評が述べられ、異本の問題に及び、「今日の学者の通説」として、所謂、池田亀鑑博士の、(一)能因所持本 (二)三巻本 (三)前田本 (四)塚本の四系統をあげて、底本の春曙抄は(一)に入るとして、(二)・(三)・(四)のそれぞ

れの本文をあげ、比較し、(一)が、「文辞の洗煉からいへば各種伝本中優位に推すべき」だとしている。能因本系統本の有力写本が翻刻されていなかった当時のこととて、これはやむをえないかもしれないが、春曙抄すなわち能因本との過信は、本文研究の長足の進歩を見た今日からすれば、やはり問題が残ろう。そして雑纂形態か類纂形態かについては、春は曙の段から「余意連想は次々に展開して四月の葵祭までが、一群一篇を成すものと見るべき」だとし、前田本、塚本は次の第二段「頃は」まで続けて、その次の「正月一日は」からは後の別の段になっっているから、「草子全体の内容を解きはぐして、同趣同類のものを類纂した」ものと見做し、「その舛裁は断じて清女原作の舛裁ではなかつたろう」としながらも、「学者によっては種々異見があるので、今日の所容易に断じ難い研究上の大問題となっている」と述べている。これは和辻哲郎博士や池田亀鑑博士の類纂原型説を尊重されての慎重なご発言かと思うが、翁自身は雑纂原型説をとっておられるようだ。

以上のように、内容は「詳解」と全く違ったものであって、通釈(それは多少意識ではあるが)も加わり、語釈も、内容が一変し、より詳細になり、余釈は全段でないにしても問題ある箇所をおさえ、「詳解」にあまり触れられていない本文の問題が、かなり採り入れられていることも、当然ことながら、旧著の面白を一新したものである。そして、さらに、今後の研究の成果をも盛り込んで、一層の訂正増補が予定されていたことは疑いない。

四

以上、これを要するに、松平静翁の枕冊子研究は、明治三十一年という、近代枕冊子研究の草創の時期に、馨斎抄、春曙抄の増補訂正という立場から出発し、当時の黒川真頼、飯田武郷、関根正直といった諸大家の説を綜合し、自己の創見も加えて、「詳解」の名のごとく、かなり詳細な全注釈という形となって結実し、その通解と称する概説も、当時としては斬新なものであった。ために、武藤元信、溝口白洋、窪田空穂、永井一孝、金子元臣、内海弘蔵らの諸家の注釈、研究に何らかの影響を与え、「詳解」の名は明治、大正、昭和の初期まで及んだ。その間、松平翁は大正四年神官となられたこともあって、内面的には研究を進められたであろうけれども、外面的にはその成果を世に改めて問われることはなかった。その間、大正の末から昭和の始めにかけて、山岸徳平博士、池田亀鑑博士らを中心として、文献学的研究が進捗し、三巻本の紹介と評価となって学界をにぎわし、研究は大きく進展した。さらにそれを受けて、塩田良平博士の鑑賞批評研究、岸上慎二博士の伝記研究、本文研究、田中重太郎博士の本文、語彙研究は従来の枕冊子研究を一変させたというべく、松平翁の研究はその歴史的意義は評価されるとしても、今日的意義は多少稀薄になったことは否定できない。その時にあたって、翁の枕冊子研究が、その後、孜孜として進められ、昨昭和四十六年三月三日九十六歳の生涯を終られるまで、ずっと続けられていたことを、ここでご報告すること

松平 静翁略年譜

は、決して意義のないことではあるまい。昭和二十三年六月、翁は神官をやめられ、それまで温めてこられた枕冊子研究への情熱は、七十三歳というお年にもかかわらず、どっと堰を切つてあふれるようになったのであった。それはわずか二年足らずで、約二千枚もの「新枕草子精義」の原稿となって結実し、さらに完璧を期そうとされたのであった。昭和二十八年には「校本枕冊子」が出版され、楠道隆教授、林和比古博士のご研究も加わつて、枕冊子の研究はより、精緻に高度化する。かくて、翁の「精義」は、学界と緊密な連繋がおりでなかった故もあつて、遂に未刊のまま、今日に及んでしまったのであった。

翁逝かれて凡そ一年、「精義」は永遠に未完の業績となつてしまつたが、その全貌をこのままの姿で出版することは、かえつて、翁のご遺志に副わないであろうが、せめて一端なりとも、と思つて、できるかぎり客観的にと念じつつ、筆を執つた次第である。したがつて、松平静翁への非礼の言辞を弄したことは深くお詫び申しあげねばならぬ。

また、本稿を草するにあつて、田中重太郎博士からご示教をいただき、その他、歌集の方面に関しては、新燈短歌社主幹松本繁蔵氏、同じく歌集、年譜の資料に関しては、北野神社権宮司片桐勲氏、同じく禰宜浅井与一郎氏にお世話になつた、記して厚くお礼申しあげる。

明治九年（一八七六）

一歳

一月 二日 福井県敦賀市常宮の常宮神社主宮本家の二男として生れる。
（後福井藩城代家老松平主馬の養嗣子となる。）

明治二十八年（一八九五）

二十歳

四月 上京し、国学院入学

明治三十一年（一八九八）

二十三歳

七月 七日 国学院卒業。

十二月 末日 「枕草紙詳解」の緒言を「雨すさまじくふる日江戸川のほとり
 隅客幽廬のうちにて」しるす。

明治三十二年（一九〇九）

二十四歳

二月 五日 黒川真頼・飯田武郷閣ならびに序・黒川真道、芳賀矢一序・渡辺文雄補助のもとに、「枕草紙詳解」上編（桜の巻）（菊版、和装、総計四二〇頁）を、東京神田区今川橋通鍛冶町 誠之堂書店から、中等教育和漢文講義第廿篇として出版。

六月 末日 「枕草紙詳解」中編のあとがき（訂正文）を「都は晴れぬながめするころ礫川なる隅客幽廬のうちにて」しるす。

八月 一日 「枕草紙詳解」中編（葵の巻）（四二六頁）を同じく誠之堂書店から出版。

九月 三十日 岐阜県師範学校助教諭心得となる。

十二月 十八日 「枕草紙詳解」下編のあとがきを「夕ぐれもの暗うなりたるころ」しるす。その文中に、関根正直博士の「枕草子集註」のこと、他日、「詳解」の不備を補うために「参考枕草紙」をつくる意図のあること、「詳解」の附録として、殿舎の事、装束の事などをまとめて出す予定であること、などが記されている。

明治三十三年（一九〇〇）

二十五歳

二月 十二日 「枕草紙詳解」下編（楓の巻）（三六二頁）を、同じく誠之堂書店から出版。

- 二月二十七日 師範学校中学校高等女学校国語科教員免許状を受ける。
- 明治三十九年（一九〇六） 三十一歳
- 五月三十日 岐阜県師範学校助教諭となる。
- 十月 八日 岐阜県師範学校教諭となる。
- 明治四十一年（一九〇八） 三十三歳
- 三月三十一日 岐阜県立中学校教諭となる。
- 大正四年（一九一五） 四十歳
- 七月 十九日 岐阜県立中学校教諭を願により退職する。
- 七月三十一日 国幣中社南宮神社（岐阜県）宮司となり、以後、神官としての生活がはじまる。
- 大正十年（一九二一） 四十六歳
- 二月 二十日 「枕草紙詳解」上編は十版を發行。版元は同じく誠之堂書店。（ちなみに、中巻は大正九年十一月三日に第八版を、下巻は大正十一年十月一日に第八版を重ねている） 四十七歳
- 大正十一年（一九二二） 四十七歳
- 七月 四日 国幣小社神部浅間神社（静岡県）宮司となる。
- 昭和三年（一九二八） 五十三歳
- 一月 十六日 正六位に叙せられる。
- 一月二十三日 静岡県神職会副会長となる。
- 八月二十一日 「枕草紙詳解」復興版（菊判、洋装、一冊。序文一二頁、通解三四頁、目次十二頁、本文六三四頁、佐伯天涯のあとがき二頁、計六九四頁、写真一葉）を佐伯天涯の編輯によって、東京市小石川区指ヶ谷町七番地 知世書房から發行。（なお、重版が後日、有宏社からも出ている） 五十九歳
- 昭和九年（一九三四） 五十九歳
- 四月 十一日 国幣中社北野神社（京都市）宮司となる。
- 四月二十一日 全国神職会評議員となる。
- 昭和十三年（一九三八） 六十三歳
- 三月 一日 従五位に叙せられる。
- 三月二十五日 全国神職会京都支部長となる。
- 昭和十七年（一九四二） 六十七歳
- 二月 一日 大日本神祇会京都府支部京都部会長となる。
- 昭和十八年（一九四三） 六十八歳
- 三月二十六日 高等官三等待遇
- 昭和二十一年（一九四六） 七十一歳
- 一月二十一日 国幣大社賀茂別雷神社宮司となる。勅任官待遇。
- 三月 一日 従四位に叙せられる。
- 五月 二日 勲五等瑞宝章を授けられる。
- 六月三十日 職制廃止により、二月二日付をもって一旦退職し、改めて本日付をもって京都市上京区鎮座賀茂別雷神社（上賀茂神社）宮司となる。
- 昭和二十三年（一九四八） 七十三歳
- 六月二十八日 賀茂別雷神社宮司を願により退職する。
- 六月 「新枕草子精義」の執筆をはじめ。 七十四歳
- 昭和二十四年（一九四九） 七十四歳
- 十二月二十三日 「新枕草子精義」（第三稿）第一〜第五まで完成。
- 昭和二十五年（一九五〇） 七十五歳
- 四月二十七日 「新枕草子精義」第六〜第卅五までこの日までに完成。同じく、緒言を、「洛東北白河寓舎にて」したためる。
- 五月 一日 同緒言・解説一冊を綴じる。 七十六歳
- 昭和二十六年（一九五一） 七十六歳
- 三月 この頃まで先に完成した「新枕草子精義」の推敲を続行する。
- 昭和三十三年（一九五八） 八十三歳
- 六月二十五日 「歌北白河」のあとがきをしたためる。その中に、「『枕草子詳解』の大改修を思ひたちまして、已に稿を改めること三回、

八月二十五日 「歌北白河」出版。
 昭和三十六年（一九六一） 八十六歳

五月 岐阜県の古い教え子たちによって、岐阜金華山城趾岐阜公園に、歌碑が建てられる。すなわち、翁の自筆で、「ふもとには小田のかはづのなくといふ山時じくにかがね花さく名ぐはしの山」と記されている。「歌稿大文字山」参照。

昭和四十年（一九六五） 九十歳

八月 十日 「歌稿大文字山」の後叙を、北白河草庵においてしたためる。
 十月二十五日 「歌稿大文字山」北野天満宮社務所内、松平静翁先生歌集刊行会から出版。

昭和四十二年（一九六七） 九十二歳

九月 十九日 同人歌集「三十六峰」の巻末余録をしたためる。同歌集には、「明治百年」として三十首、「老いの道草」として百十首を寄せらる。

昭和四十三年（一九六八） 九十三歳

四月二十五日 同人歌集「三十六峰」京都市伏見区桃山御香宮社務所内三十六峰刊行会から出版。

昭和四十六年（一九七一） 九十六歳

三月 一日 共同歌集「逢坂山」京都市左京区岡崎平安神宮社務所内榊葉会同人から出版。

三月 三日 京都市左京区北白川西瀬内町三十の閑居において歿す。

六月 短歌誌「新燈」第百八十四号に、追悼号が特集される。若き日の松平先生 松原又一、松平静先生と常宮の産屋 高橋啓三、

松平先生とわたくしと 田中重太郎、松平先生の御葬儀 浅井与一郎、神さりました 中島佐津、などの追悼文と、松平先生

略歴・歌歴 松本繁蔵をおさめる。

(注) なお、本略年譜は翁の神官としての面に手薄である。それはその道の方のご叱正を得て増補したい。

注一 中等教育和漢文講義という叢書は、国語漢文の注釈シリーズで、今泉定介の伊勢物語講義、同竹取物語講義、同土佐日記講義、畠山健の百人一首講義、三木五百枝の紫式部日記講義なども入っている。

注二 日本古典鑑賞講座「枕草子」所収、枕冊子研究史物語三九三頁。

注三 国語国文学研究史大成6「枕草子徒然草」二三八頁。

注四 最近では、「諸説一覽枕草子」(明治書院昭和四五・五刊)中の注釈書・研究書の項(神作光一氏執筆)や日本文学研究資料叢書「枕草子」(有精堂昭和四五・七刊)中の解説II「枕草子」研究史素描(増淵勝一氏執筆)においてもとりあげられている。

注五 翁と旧交のあった北野神社権宮司片桐勳氏のお話による。

注六 段数は、とくに、ことわらないかぎり日本古典全書本による。以下同じ。

注七 「新稿枕草子精義」は未刊のものであるが、一往、所在を示しておく、第二の九八頁。

注八 「枕草子形態論」「国語国文」昭和二十九年十二月号。『枕草子の本文から考えた成立論』『国文学解釈と鑑賞』昭和三十九年十一月号。これらは、「枕草子異本研究」(笠間書院昭和四十五年四月刊)に再録されている。

注九 「精義」第十五、七十三頁、第七十二段(この段は「精義」の段)里にまでたたるに「語釈」。

注十 「精義」第廿七、五十一頁、第百六十段(この段「精義」による)宮に始めて参りたる頃の「語釈」。

注十一 「精義」の段は第二百五十二段。